

この雑誌は住宅生産振興財団の機関誌という性格上、戸建て住宅地のまちなみ環境をいかに向上させていくかという視点を軸に据えています。都市化や工業化に代表される20世紀が終わろうとしている今、この小冊子としても私たちが何を獲得してきたのか、今後のまちづくりにとって何を付け加えることができるのか、大いに活発な議論、問題提起、発表の場になって欲しいと願っています。

考えてみれば、わが国では戦後一貫して郊外開発が行なわれ、アメリカンドリームならぬジャパニーズドリームとしてのマイホームが庶民の夢の実現として大量に建設されてきました。しかしそれは「土木」に「建築」を継ぎ足し、計画の意思と住まい手の意思の十分な交流もないままにつくられた「その場しのぎのまち」であったかもしれません。そのまちも人が住みつづけることによって、今はある種の成熟過程に入り再編成が必要とされているでしょう。

『家とまちなみ』も計画技術のみならず、人々の「生活」そのものに対する視点を豊かにしていくことが求められているはずです。

今回ご寄稿いただいたいくつかの原稿からも「まち」と「住まい手」の対応において「よいまちがつくられる」という視点を感じました。

西村先生の表紙とエッセイ「高梁の町並み」は歴史のまち高梁に新たな歴史が加えられつつある状況の報告、篠原先生はご自分の居住地における桜並木を、緑の環境ととらえるばかりでなくコミュニケーションのツールとして「まちの誇り」につなげて考える思考の柔軟さを示されています。

谷根千の山崎さんは新聞でも話題になった都内で唯一富士山に見える富士見坂の消滅を怒りを持って惜しみつつ、下町を「人情のある町」というけれど「町」に人情があるんじゃないよ、それは作り出すものだよと上品に啖呵をきってくれました。全く同感です。

地方において住宅地開発をしている池田さんはこの6月のアメリカの住宅地視察に参加されて面識を得ました。地方でも住宅地ではなくコミュニティを作りたいという意欲と見識に拍手です。

そのアメリカツアーを昨年に続いてコーディネートしていただいた渡先生の「アメリカの住宅地開発 その2」です。アメリカに学ぶことはITぐらいというおごりも目に付きませんが、とんでもないことで、ビジネスとデザインがすごいのだ

と感じさせられます。デザインという分りにくいことを的確な言葉で語る渡先生の名論文だと思います。ご一読を。

成瀬さんには連載3回目として彼が公団時代に手がけた多摩NTの長池中央地区（N-City）のコンセプトメイキングのプロセスをご報告いただきました。新たな問題提起もされていますので、何らかの形でフォローしてみたいものです。

酒井先生の「成城」の後編（実は初めから執筆済みでしたが掲載の都合で2回に分けさせていただきました）です。朝日新聞による「朝日住宅展覧会」など、この時期（昭和初期）の新聞の役割と反響の大きさは注目ものですが、町が長い年月で変質していく様は、先般アメリカでほとんど変化しない「ラドバーン」を見た目には気になるところです。

良くも悪くも産業革命後の人口集中による都市問題の発生が近代都市計画の温床だったわけですが、ハーワードの田園都市や英国のニュータウンほど知られていないのが企業が産業と一体として行なった町づくり、住宅地づくりです。藤谷先生はこの分野の研究者ですが、世界各国で行なわれた（もちろん日本でも）これらの仕事わが国では評価もされず、知られもせず消滅して行くことに危機感をお持ちです。筆者もドイツのシーメンスシュタットやアメリカのデュポンの工場村（？）が立派な記念建築物として居住、維持されていることを見ているだけに、彼我の差を感じます。

本誌としては異色ですが、建設省住宅局住宅政策課の音瀬対策官に米国の借家制度と不動産証券化事情を報告していただきました。わが国でも定期借地制度に引き続いて定期借家制度が導入され、さらに証券投資信託法の改正により、不動産証券化に向けての環境整備がすすむ中で、最新の米国事情をお伝えします。

第17回のすまい・まちづくり設計競技は岡山市の中島をモデルにした既成市街地のアイデアコンペでした。地方都市の中心市街地の再活性化は、ここ当分の大きなテーマでしょう。

最後になりましたが、この7月から財団は21歳になりました。つまり20周年という節目を何の特集も組まずに過ぎました。今回は、初代、二代目専務理事の回顧録をお届けします。

遅れていますが記念事業としては『日本のコモンとボンエルフ』（仮）という事例集を刊行いたします。これはおつてご案内をいたします。乞御期待。

（大川）